

皆様、おはようございます。先週は日曜日の午後、エマオの途上に行く弟子たちにイエス様が近づいてくださり、語りかけて下さった出来事を読みました。

弟子たちは、今エルサレムで起きていること、話題でもちきりになっていること、すなわちイエス様の十字架と埋葬、そして遺体がなくなってしまったこと、そして女性たちが語った復活の出来事を話していました。

11キロメートルの旅路。その間中、クレオパともう一人の弟子はその出来事について互いに語り合い、論じ合っていました。しかし論じて、考えても釈然とせず、悶々としていました。頭の中がそんなことで一杯になって、彼らは、自分たちに近寄って、隣にいて、語りかけて下さるお方がイエス様だとは気付きませんでした。

「彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった」のです。これは神様がそのようにされたのではなくて、彼ら自身の心が閉ざされていたせいだと思います。

悲しそうな顔をして立ちどまり、復活の出来事を信じるのが出来ずにいる弟子たちを前に、再び共に歩きつつ、イエス様は丁寧に、聖書全体に渡って、ご自身について記されてあることを解き明かしてくださいました。後にこれを聞いた弟子たちは、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださいましたとき、お互いの心が内に燃えたではないか」と語り合っています。

私の拙い証しを先週はお話いたしました。困難な状況の中、私たちは不遜にも、こんなに切迫した、目前の問題にあっては、自分の力でどうにかするしかない信じ切って、自分の力でどうにかするしかないと考え、目には見えない神様(目がさえぎられていて、まさに目に見えていない神様!)に頼っても仕方がないというような心理的状态に陥るのです。

御言葉も、神様の存在も、そのような困窮極まる状況の中では急速に霞んでいき、自分の手と足と頭で対処していかなければならないのだという、一見勇壮な考えですが、そこには実に無力と鈍感、知恵も力もない、幹から遠く隔たって、枯れ行く枝、どんなに頑張っても、幹につながっていなければ実を結ぶことのできない枝のような状況があるばかりなのです。

しかし主はそんな困難で、混沌としていて、先行きの分からない暗雲垂れ込める状況の中で、雄々しくも御言葉を語りかけられます。それは主がお苦しみの中、ご自身がどうなっていくかが克明に記されたみ言葉でした。主は苦難の中、御言葉の中にご自身があらわされてあることを知り、そのすべてから逃れずに、御言葉に従い、御言葉がご自分の身に成就することをひたすら願われました。主は御言葉と共に生きました。御言葉全体から、ご自身がどういう定めで送られ、遣わされていて、苦しみを受け、その後に栄光に入られることを学び、それをよりどころとして進まれました。主が弟子たちに確信をもって語られ、弟子たちの心を熱く明るく燃やされた神様の御言葉は、実に主ご自身を奮い立たせ、希望と勇気を与え、明るく燃え立たせた御言葉そのものでした。

エマオの途上の二人は、イエス様だと分かるや、御言葉によって心燃やされていたことを自

覚し、混沌の中にも主が共にいますことに喜びを爆発させ、すべては御言葉の通り、すべては神様の定められたとおり、私たちの中は一縷の混沌もない、すべては神様のご計画の通りと、喜びにあふれ、新しい力は漲り、夕方ですからもう休みましょうと語っていたのにさっき来た道を取って返して11キロメートルの道を喜びにあふれて戻り、他の弟子たちにその出来事を語り、共に喜び、信仰の交わりを持ったのでした。

こう話していると、ここからが今日の出来事です。

36 こう話していると、イエスが彼らの中にお立ちになった。〔そして「やすかれ」と言われた。〕

さあ、どうでしょうか。こんなにみんなでイエス様のことで喜んで、盛り上がって話しているのですから、その真ん中にイエス様がお現われになったら、「さあ、イエス様、お待ちしておりました。ちょうどあなた様のことをお話しておりました。復活の主よ、喜んでお迎えます、賛美と感謝をおささげいたします。」と、このようであって然るべきだと思います。イエス様は、彼らの真ん中に立って、「安かれ」「平和と平安、調和があるように」と彼らに語り掛けて下さいました。

37 彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。

しかしどうでしょうか。彼らは恐れて驚いて、幽霊を見ていると思いました。ついさっき出会って、あんなに励ましていただいたのに。パンを割いて与えていただいたのに。励まし、力づけ、祝福し、糧を与えて下さったのに。こんなにもすぐにどうやったら主を忘れることが出来るのでしょうか。私たちは啞然としてしまいます。しかしこれが私たちにとっても事実なのです。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とは言いますが、本当に私たちも、容易に主の恵みを忘れてしまう存在なのです。いつも主に良くしていただき、困難の時、あんなにも主は私たちに恵みを与え、私たちを死の暗闇の谷から救い出してくださいましたのに、またも私たちは迫りくる次の困難の時に、希望も力も奪い取られたようにおろおろして恐れ惑うのです。

38 そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。ここでイエス様は、「なぜ」「どうして」と、二回にわたってなぜという言葉をかけられます。なぜ恐れるのか、なぜあなたの心に思いが、意見が、理由付けが、動機付けが、疑いが、疑問が湧いてくるのか？

39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。

40 〔こう言って、手と足とをお見せになった。〕

事実を見れば、明々白々なのに、その事実や現実から隔離されて、非現実であるものの中に捕らわれ、恐れ、怖がり、心の中を自分の感情や思いで溢れかえらせ、そして現実を見ようとしなない私たち。そのように心の殻を厚くして、心の中に閉じこもり、ああではない、こうではないと考えあぐねる私たち。その私たちに神様は、現実を示されます。

自分はもう不治の病にかかった、もう治らないと嘆き悲しみ、取り乱し、希望を失い、食事ものどを通らず、衰弱する人にも、レントゲン写真を見せれば、血液検査の結果を見せれば、何よりの動かない証拠となるように、イエス様はご自身のお身体を弟子たちに見せて下さいました。さあ見て触りなさい、私だと主は語って下さいました。

41 彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。

42 彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、

43 イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。

これも溢れる主のお優しさをご配慮です。主は信じることの遅い者、知ることの遅く鈍い者に対して、見せて、教えて、分かるように、噛んで含めるように諭して下さいます。

「喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思」う、これこそがいつも主がして下さいます恵み深い御業です。こんな大きな喜びがあつていいのだろうか？こんな大きな喜びは果たして現実の事だろうか？こんなに大きな喜びが与えられるなんて、本当に驚きだ！そういう「喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思」う、そういうことを神様は、ご自分の愛する子に、そういうことをして下さいます。そしてそのことは、現実にかかるのです。夢ではなくて、本当に起こるのです。

44 それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。

45 そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて

46 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。

「聖書を悟らせるために心を開かせる」主です。私たちは、すぐに心を閉ざすのです。すぐに思いを、考えを、意図を、意思を、理解を、識別を、洞察を、認識を、神様に対して閉ざすのです。容易に自分の殻に閉じこもって自己満足の世界に生きようとします。誰のためにも心を、思いを、考えを、意図を、意思を、理解を、識別を、洞察を、認識を開こうとせず、自分の心を、思いを簡単には変えようとしない頑固な存在です。しかしそういう生き方をし

ていては、聖書を悟ることが出来ないのです。

45 そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて

46 言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。

47 そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。

48 あなたがたは、これらの事の証人である。

その私たちの頑固な心、神を神とせず、自分を第一に考え、傍若無人にふるまう、神も隣人も無視して自分が一番の人生を送る私たちの的外れの罪から救うためにキリストは苦しみを受けて、三日目にその死人の状態の中からよみがえられ、贖いを成就されたのです。

そのイエス様の名によって罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まって、もろもろの、すべての国民に宣べ伝えられるのです。

私たちは、この事の証人です。

まずそのために、私たちは、自分のかたくなさ、心を容易に閉ざし、厚い殻に閉じこもる、信じるに遅く、見て信じるに遅い自分自身の様を自覚しなければなりません。その悔い改めは、エルサレムから、神様を信じる者のうちから始まらなければなりません。知っているつもり、信じて、分かっているつもりではいけません。その自己のかたくなさを自覚し、悟ることに遅く、心を閉ざす自らのかたくなさの罪を悔い、主に心を開いて頂き、御言葉を本当に悟るものであることが出来ますように。そうして整えられた私たちは、苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえられたお方、そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる、その証人となるのです。

49 見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。

50 それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。

51 祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕

52 彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、

53 絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。

さてここからペンテコステの出来事が始まります。聖霊を受けて、いよいよ力強く彼らが進んでいく時がやってきます。

「上から力が授けられる」のです。

力とは、強さ、力ある行い、奇跡、超自然的な力、能力、才能、可能性、手段という意味をも持ちます。この力は、素晴らしい神様の奇跡をおこなわせる力、能力、才能、そういう可能性を満ち満ちて与えます。そういう上からの力、聖霊が私たちにも与えられています。信じる仲間たちとともに、都で、神殿で一つになって集まり、祈りを捧げてとどまっていなさい。イエス様は手を挙げて彼らを祝福され、彼らを離れて天に上げられました。彼らは非常な、これ以上ない喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて神様をほめたたえていました。

宮にいる人たち、祭司長や律法学者たちは彼らに目を光らせ、弟子たちは彼らを恐れていたのですが、このイエス様によって心満たされ、非常な喜びに満たされ、心開かれて、イエス様をのみを心に満たした彼らにとって、恐れはおそれではなくなっていました。

私たちも共に教会に集い、心を開いて聖書を悟らせていただき、聖霊様によって聖書を説き明して頂き、お互の心が内に燃え、喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思いながら人生を導かれ、私たちの主の贖いによる救いを語り、悔い改めの中、私たち自身をもその内に導かれ、救いを証しし、上よりの聖霊の力により、このうえもない喜びと力の中、能力と洞察力と実行力とを頂き、主の証し人として進ませていただきたいと願うのです。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。いつも心配や恐れあまり、主が共にいて助けて下さることも、力と希望を与えるいのちの御言葉にも心を閉じてしまう私たちの心の目を開き、慰め、励まし、力強い御言葉の息吹をお送りくださいますことをありがとうございます。今週も、復活の主の力により私たちを癒し、強め、生かしてください。子供からお年寄りまで、あらゆる年齢の方々が、この時こそ教会にて、イエス・キリストに出会うことができますようお願いいたします。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。

主イエス様の御名によって祈ります。アーメン